

紹介

チャールズ・E・マクレランド
(望田幸男監訳)

『近代ドイツの専門職』

—官吏・弁護士・医師・聖職者・
教師・技術者—

本書は十九世紀初頭の生成期からナチ体制下に至るまでのドイツの知的専門職の制度化に関する包括的研究である。

今日のシステム社会の成立を「プロフェッショナルリゼーション(専門職化)」から分析しようとする研究は、社会学においては既に確立した研究領域となっている。しかし、そうした研究が英米中心の「自律性をもった」専門職をもっぱら研究対象としたため、国家と密接に結び付いた、あるいは国家によって認定され保護された専門職といった「ドイツ型」の存在は例外として片付けられてきた。しかし、そうしたドイツ型専門職の在り方は我が国の例を引くまでもなく、英米以外の圧倒的多くの国で普遍的な専門職のモデルであったのではないか。

そうした視点から本書は次のような問いに一定の解答を与えるものである。アメリカの専門職が、専門職プロジェクトを閉鎖的・自律的な組織として実現したのに対して「なぜドイツの専門職は、自分たちの組織・国家官僚・高等教育機関、三本の一定の流動性ある相互作用のほうを望んだのか」(三五頁)。このプロセスを十九世紀以後のドイツ史にそくして説明することで著者は、近代化と専門職の発展に対する英米中心的な議論の枠を修正することを目指している。その意味では、既に本書の監訳者によって我が国に紹介されているイギリス社会史派のドイツ史論が「ドイツ特有の道」という固定観念を打破し、むしろ英米以外の後発的な近代化においてドイツモデルを「特殊」ではなく、むしろ「一般」と捉える立場に案外近いのかもしれない。第一章以下、各章ごとの構成は次のようになっている。

第一章「十九世紀初期における近代的専門職への移行」ではドイツにおける「近代的専門職の発端」(第一節)と、四八年革命から七一年ドイツ統一までの時期の発展(第二節)を扱っている。アングロ・サクソン国家と比べて、専門職に対する国家の

監督の厳しさを歴史的原因是に、領邦国家における教会と国家関係の確立、貴族の官僚化、軍事的指向における効率性の追求、市民教育の必要性、という四つにまとめられる。また、一八四〇年代の時代状況に対する不満が専門職の組織化の原動力となったとして、四八年革命前後の変化を跡付けている。英米モデルの特徴である国家からの自律性については、専門職組織の全国化が国民国家の成立と平行的に進行したドイツでは、自律性を保証する手段として国家と結び付こうとする傾向が生まれたことが指摘されている。

第二章「統一ドイツにおける専門職の統一」では、第二帝政成立から世紀転換期までの発展において「自由専門職」として医師・法曹・技術者・科学技術者(第一節)を、「国家公務員職」として教師・聖職者(第二節)を扱い、第二帝政下での資格認定の制度を分析している。この時期に伝統的な官僚制度をモデルとして教育と資格の基準を引き上げることで、専門職組織が排他的独占を確保することに成功した過程が跡付けられている。

第三章「専門職のカルテル化と団体化の

時代」では、二〇世紀初頭からドイツ革命までの展開を扱う。この時期に「自由専門職」(第一節)ではいっそうの専門分化が起こり、また職能組合モデルを指向しはじめ、「社会団体主義」へ適応していった。

その結果、専門職集団は「政党を超越する」国家と心理的に一体化し第一次大戦では協力を貫いたが、戦中と戦後のインフレは専門職の過剰と貧窮化を現実のものとした。

また、弁護士・裁判官・高級官吏・企業管理者など「法学を基礎とする専門職」(第二節)においても、以前は自己同一化の対象とであった国家との関係が変化し自己の利害を求める圧力団体的な組織に発展していったことが指摘されている。

第四章「ワイマル期の専門職業」では、急激な社会変動、あるいは政治的混乱の中で専門職団体が自らの資格証明の社会的下落に如何に対応したかが跡付けられる。この時期に「独立した自由専門職」の比率は減少してゆき、公務員や大企業の被雇用者となり、医師の大半も保険金庫や公的病院に依存する構造的傾向が顕著になった。専門職は一般に社会民主党など左翼を敵視し、国家人民党など野党の右翼政党を支持する

場合が多かったが、ヒトラーの権力掌握までナチ党の支持者は少数派に過ぎなかった。

第五章「ファシズム下の専門職とその後の運命」では、大恐慌の影響下で「プロレタリア化」あるいは「脱専門職化」に直面した専門職組織がナチズムと如何に関わったかが検討される。結果的には、専門職組織はある程度は自発的なナチズムの協力者であったが、「画一化」の犠牲者でもあった。戦後は、一九三三年以前の状態で復帰する方向で、専門職集団と国家机关の高度な協力が顕著になった、とまとめられている。

以上、本書によって読者はドイツ近現代史の専門職像を概観することが可能となる。だが、あえて個人的な望みを言えば、叙述のバランスで第二帝政期が質量ともに突出しているのは、著者マクレランドのこれまでの研究蓄積との関係で止むおえないことではあろうが、近代化一般を語る際に戦時動員体制下の社会構造の変化が重要な意味を持つことを考えれば、第一次、第二次大戦中の分析が僅かしかないのは残念である。その上で「ナチスが権力を握っていた十二年間の全過程を観察してみれば、専門職と

それまでの専門職化の計画に対する影響は、ほとんどまったく否定的で破壊的であった」(二九六頁)とむしろ陳腐な結論を引き出すのは若干結論を急いだ感が拭えない。それゆえに、ナチ下で初めて「専門職」と認定させたジャーナリストについての言及が極く僅かしかないことも残念である。一九三三年「ドイツ記者法」で初めて国家認定されたジャーナリストの専門職化を論じれば、ドイツ型プロフェッションナリゼーションをより多角的に考察できたように思える。また、最後の「結論」部分で触れられている興味深い視点―たとえばドイツの高等教育は国家の補助金が多かったため、英米よりも安上がりで「開放的」であった(三〇五頁)―が、本論の分析に十分反映されていないことも惜しまれる。

本書の扱ったテーマは、広義には「知の社会史」と呼べるものであり、既に邦訳させているリンガー『読書人の没落』などとともにドイツ近現代史の理解に欠かせない一冊となるであろう。また教育史、大学史はもとより広く近代化の論議にも興味深い素材を多く提供する好著である。この翻訳は「近代ドイツ」資格社会」論研究会の共

同研究の一環であると聞くと、この本書の上に構築させる新しいドイツ社会史像に期待したい。

(A5判 三二七頁 索引・注 三〇頁)
一九九三年九月 晃洋書房 四三〇〇円
(佐藤卓己 同志社大学文学部専任講師)

受贈図書

(一九九二年七月六日)
一九九三年七月一日)

大美和 八三、八四

HISTORIA MEXICANA (EL COLEGIO DE MEXICO) 41-2, 4, 42-1

Historische Zeitschrift 254-2, 3, 255-1~3, 256-1

古代文化(古代学協会) 四四七~二二、四五一一~六

史料(皇学館大学史料編纂所) 一一八~一二三

白山史学(東洋大学白山史学会) 二八、二九

熊本研究文献目録 人文編(熊本県企画開発部 文献開発部) 二

東洋大学文学部紀要(東洋大学文学部史料学科) 四五

斯道文庫論集(慶応義塾大学斯道文庫) 二六

東方学会報(東方学会) 六二、六三

東海地域文化研究(東海地域文化研究所 愛知女子短期大学) 三

大倉山論集(大倉精神文化研究所) 三一、

三二、三三

一橋論叢(一橋大学一橋学会) 一〇八一

一六、一〇九一~六

東洋史研究(京大文学部内東洋史研究会) 五一~一四

福岡大学人文論叢(福岡大学総合研究所) 二四一、三、四

Catalogo de Publicaciones (EL COLEGIO DE MEXICO) 1992

国家学会雑誌(東大法文学部国家学会) 一〇五~一二、一〇六一~四

オリエント(日本オリエント学会) 三四

一二、三五~一

日本歴史(吉川弘文館) 五三一~五四二

経済研究(一橋大学経済研究所) 四三~三、四、四四~二

横須賀市博物館研究報告(横須賀市人文博物館) 三六

社会経済史学(社会経済史学会) 五八一

一六

日本史研究(日本史研究会) 三五九~三六九

神道学(神道学会) 一五三~一五六

一橋研究(一橋大学大学院一橋研究編纂委員会) 一六四、一七一~三

おわびと訂正

前号(七七巻二号)の堀地明氏の論説「清代前期食糧暴動の行動原理」に図版の入れ違いがありました。おわびとともに訂正いたします。

訂正箇所

七五頁のグラフの折線グラフと、七四頁のグラフの棒グラフとを入れ替える。